

T あんど M カンパニー　ひなたぼっこ

富山（とみやま）　哲次（てつじ）さん（54歳／右）
美和子（みわこ）さん（53歳／左）

- 利根町布川在住
- 夫婦二人三脚で、50代から飲食業に挑戦
- キッチンカーと店舗で営業中
- 「シン・いばらきメシ総選挙」に、利根町代表グルメとして出店

利根ニュータウン商店会の一画に、せいろから立ちのぼる白い湯気と、中華まんの食欲をそそる香りが広がります。

今年7月、チャレンジショップ「とねまち0→1 BASE（ゼロワンベース）」にオープンした「ひなたぼっこ」は、店主の富山（とみやま）哲次（てつじ）さんと妻の美和子（みわこ）さんが営む手作り中華まんのお店です。

二人が中華まんの店を始めたのは、50代になってから。利根町への移住をきっかけに、これまでの仕事や経験を生かして、新しい一歩を踏み出しました。

今月の「シリーズまち・ひと・しごと」は、富山さんご夫妻の中華まんづくりへのこだわりや、起業を決断するまでの道のり、そして地域の人たちに愛される店を目指す二人の思いをご紹介します。

利根町で始まった新しい暮らし

二人が利根町へ引っ越してきたのは、令和3年11月のこと。結婚当初はつくば市に住んでいましたが、哲次さんが千葉ニュータウンへ通勤していたため、もっと通いやすい場所を探していました。そんなとき、不動産屋から紹介されたのが、現在住んでいる布川の家でした。

リフォームしたばかりの中古戸建てで、土地も広く、趣味の車を3～4台停めることができ、栄橋を渡れば千葉ニュータウンにすぐ行けることが決め手となり、利根町で暮らすことを決意しました。

住み始めてすぐ、近所の人たちがいろいろと親切に教えてくれたことで、「優しい人が多い町だな」と感じたという哲次さん。

美和子さんも、つくば市にいた頃にはほとんどなかった近所付き合いを経験するようになりました。家を空けていても周りの人が気にかけて見ていてくれるなど、温かい人が多い町だと感じたそうです。

好きなことを仕事にしたい

哲次さんは、若い頃にSE（システムエンジニア）として働いた後、出身地の北海道で約4年間、中華まんなどの製造・販売に携わった経験があります。その後、再びSEの仕事に就き、美和子さんと結婚。つくば市で暮らした後、利根町へ移住しました。

50代になり、定年後の働き方を考えるようになると、これまでの経験を生かし、好きなことを仕事にしたいという思いが強くなりました。そこで、副業として中華まんの製造・販売を始め、テントでの出店からキッチンカーへと活動を広げていきました。

しかし、SEの仕事は忙しく、夜遅くまで働いた後に、睡眠時間を削って仕込みをし、また仕事に向かうという生活が続き、ついには体を壊してしまったといいます。このまま二つの仕事を続けることは難しい。そんなとき、利根町のチャレンジショップを借りられることが決まり、SEを辞めて中華まんの製造・販売に専念することを決めました。

もちろん不安はありましたが、美和子さんから「まあ、何とかなるでしょ。やっちゃえば？」と背中を押されたことで決断しました。「清水の舞台から飛び降りるような気持ちでしたね（笑）」と、哲次さんは当時を振り返ります。